都農町文化財調査報告書第２集

新別府下原遺跡

（しんびゅう　しもばる）

県営都南地区圃場整備事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査概要

1989

宮崎県児湯郡

都農町教育委員会

都農町文化財調査報告書第２集

新別府下原遺跡

（しんびゅう　しもばる）

県営都南地区圃場整備事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査概要

1989

宮崎県児湯郡

都農町教育委員会

序

この報告書は昭和６３年度、県営ほ場整備事業に伴ない、児湯農林振興局の委託を受け、都農町の都南地区に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の記録であります。

６３年９月から平成元年２月までの発掘調査の結果、縄文土器、石斧、石鏃、弥生土器、磨石、石庖丁、砥石、石錘、鉄器等々数多くの遺物及び遺跡が発見されました。

これらの遺物を郷土の歴史的遺産として適切な保管をはかり、本書の刊行が町史解明の貴重な資料となることは、ひいては郷土愛の機運を醸成することとなりまことに意義深いものがあります。開発と文化財の保護に思いをいたし、広く生涯学習の資料として御活用を願います。

本事業の推進と本書の刊行にあたり、県文化課、児湯農林振興局、都南地区土地改良区、等関係各位の御指導、御協力に対し深甚の謝意を表しますとともに、直接、発掘調査、刊行に積極的な御尽力をいただきました長津宗重氏他各位へ厚くお礼を申し上げます。

平成元年３月

都農町教育長　守　　部　　寛

例　　言

1. 本書は、都農町都南地区の県営圃場整備事業に伴ない、昭和６３年度に実施した新別府下原遺跡の発掘調査概要報告書である。

2. 発掘調査は、都農町教育委員会が主体となり、県文化課主任主事長津宗重が担当した。

3. 調査組織は次の通りである。

調査主体　都農町教育委員会

教育長	守部	寛
社会教育課長	河野	武光
課長補佐	河野	吉孝
主査	金谷	サエ子

特別調査員　愛媛大学法文学部教授　下條信行
　　県総合農業試験場科長　有村玄洋

調査員　長津宗重

発掘作業員　入江富積・植田常一・植田タツエ・内野宮尊信・遠藤宏二・大喜多スエ・大喜多茂・河野清美・河野吉夫・河野ゼン子・河野良雄・神崎五月・九鬼武夫・黒木カツヨ・黒木年男・黒木初美・黒木正春・黒木三代子・佐山恭三・長友シヅ子・長友愛子・長友綾子・永山光子・坂田信子・西尾　昇・西尾富子・西尾りきこ・原　節子・坂東順子・松下トシ子・三輪信夫・矢野忠利・山崎美春・山本房義・山本チヨ子・横尾芳寛

整理作業員　家村真澄・河野清美・田原辰子・富高和子・野田和美・増田慈子・森　美知子

4. 本書の執筆は、長津・河野が分担し、文責については目次に明記している。

5. 本書の編集は長津が担当した。

6. 土器の色調は農林省農林水産技術会事務局監修の標準土色帖による。本報告の方位は磁北である。またレベルは海抜絶対高である。

本　文　目　次

第 Ⅰ 章　序　説……1
1. 発掘調査に至る経緯……河野……1
2. 新別府下原遺跡の歴史的環境……長津……1

第 Ⅱ 章　遺構と遺物……長津……4
1. 調査区の設定と概要……4
2. 包含層の状態……4
3. 弥生時代の遺構と遺物……7

第 Ⅲ 章　ま と め……長津……14

挿　図　目　次

第1図　新別府下原遺跡周辺の遺跡分布図……2
第2図　新別府下原遺跡の遺構分布図……5～6
第3図　A地区1号住居実測図……8
第4図　B－7区1・2号周溝状遺構実測図……9～10
第5図　B－1区4号住居・2号土壙実測図……11
第6図　弥生土器実測図……12
第7図　磨製石斧・石庖丁・実測図……13

表　目　次

第１表　竪穴住居観察表……8

第２表　弥生土器観察表……１３

図　版　目　次

図版１　Ａ地区（発掘前）・Ａ地区（西から）

図版２　Ａ地区１号住居遺物出土状況・Ａ地区１号住居出土石庖丁

図版３　Ａ地区１号住居・Ｂ地区土層断面

図版４　Ｂ地区（発掘前）・Ｂ地区全景（東から）

図版５　Ｂ－１区全景・Ｂ－１区全景（東から）

図版６　Ｂ－１区３号住居・Ｂ－１区４号住居

図版７　Ｂ－１区１号周溝状遺構・Ｂ－１区２号土壙遺物出土状況

図版８　Ｂ－２区全景・Ｂ－３～４区全景

図版９　Ｂ－７区全景・Ｂ－７区１・２号周溝状遺構

図版10　Ｂ－７区１号周溝状遺構土器出土状況・圃場整備事業中のＡ地区

第Ⅰ章　序　　説

1. 発掘調査に至る経緯

宮崎県児湯郡都農町において、昭和58年度から、都南地区の県営圃場整備事業が行なわれている。昭和62年度に都農町教育委員会が、町内の遺跡詳細分布調査を行ない事業区内における遺跡の存在が確認された。さらに県文化課の63年３・６月の試掘により再確認された。調査により事業区内に遺跡の存在が判明したため、宮崎県児湯農林振興局と埋蔵文化財の保護について協議が行なわれたが、事業施行上、保存が困難な部分は、事業との並行発掘により昭和63年度に記録保存の処置をとることとなった。昭和63年８月に地元との協議も終り、同年９月５日～平成元年２月１日まで発掘調査が行なわれた。

都南地区の圃場整備事業は、本年度で面工事は終了し、来年度以降道水路舗装工事が残されている。調査は、都農町教育委員会が主体となり、宮崎県文化課　長津宗重氏が担当した。

2. 新別府下原遺跡周辺の歴史的環境

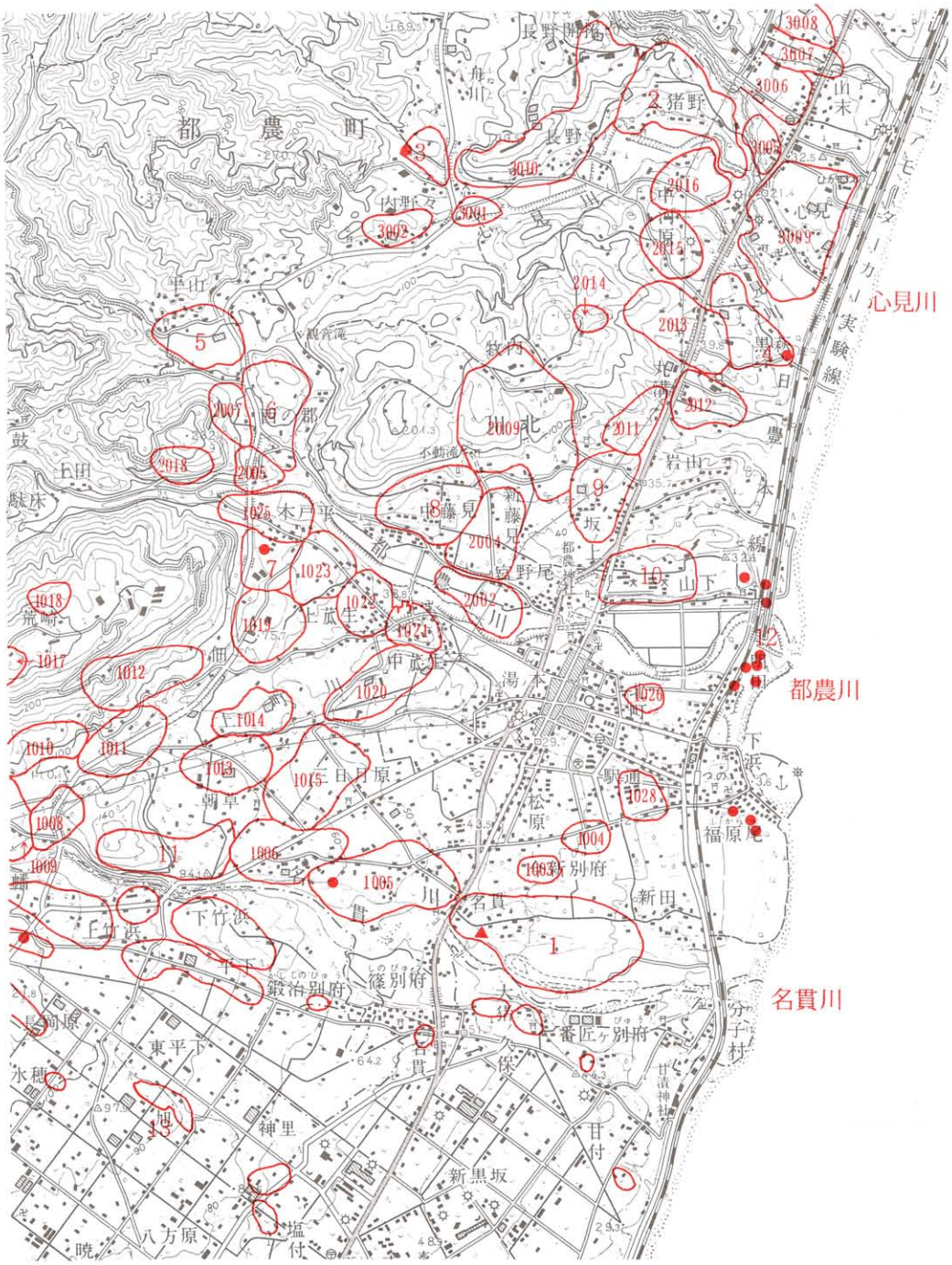
都南地区遺跡は宮崎平野北部段丘群の三角洲性低地(1)（名貫川開析扇状地）で、標高３０ｍ、比高１０ｍである。

都農町内の遺跡は心身川、都農川、名貫川流域に分布している。

旧石器時代遺跡としては尖頭器・石核が出土した黒萩遺跡(2)が知られていたが、遺跡詳細分布調査(3)によって京塚遺跡(4)・又猪野原遺跡(5)で剥片が表採された。

縄文時代の遺跡は台地（美々津－都農段丘群、名貫川開析扇状地）に分布している。早期の遺跡としては、楕円形・山形・格子目の押型文の土器、打製石鏃などを出土した竜ケ平第１遺跡(6)、楕円形・山形の押型文・打製石鏃を出土した舟川中原遺跡(7)がある。後期の遺跡としては、綾式の土器・石錘を出土した三日月原遺跡(8)がある。

弥生時代の遺跡としては、中期の新別府下原遺跡・新田遺跡(9)があり、特に新別府下原遺跡では、試掘調査によって５軒の竪穴住居が確認されている。後期の遺跡としては、後期初頭の又猪野原遺跡、後半の境ケ谷第１遺跡、末葉の木戸平遺跡(10)がある。境ケ谷第１遺跡(11)では２軒の竪穴住居が確認され、鉄器（鉈）も出土している。また耕作中に一辺５



第１図　新別府下原遺跡周辺の分布図(縮尺　1／50,000)

1. 新別府下原遺跡(▲)　2. 又猪野原遺跡　3. 舟川中原遺跡　4. 黒萩遺跡
5. 平山遺跡　6. 西ノ郡遺跡　7. 木戸ノ平遺跡　8. 京塚遺跡
9. 境ケ谷第１遺跡　10. 中原遺跡　11. 竜ケ平第１遺跡　12. 都農古墳群(•)
13. 東平下周溝墓群

1001	篠別府遺跡	1021	鍛冶屋敷遺跡	2016	旧牧跡第２遺跡
1003	新別府遺跡	1022	鹿牟田遺跡	2017	松ケ鼻山遺跡
1004	新別府肥遺跡	1023	上苽生遺跡	2018	井手ケ平遺跡
1005	新別府川原遺跡	1025	木戸平第２遺跡	3001	内野下原遺跡
1006	下原遺跡	1026	森遺跡	3002	内野遺跡
1008	竜ケ平第２遺跡	1027	相見遺跡	3005	心見住還上遺跡
1009	立野遺跡	1028	福原尾遺跡	3006	山末大原第１遺跡
1010	尾立遺跡	2002	師匠田遺跡	3007	山末大原第２遺跡
1011	俵石第１遺跡	2004	黒石遺跡	3008	宮川遺跡
1012	俵石第２遺跡	2005	川神田遺跡	3009	心見遺跡
1013	朝草原遺跡	2007	西ノ郡第２遺跡	3010	長野遺跡
1014	湯牟田遺跡	2009	白水遺跡	3011	舟川尾立遺跡
1015	榎土手遺跡	2011	境ケ谷第２遺跡	3012	下征矢原遺跡
1016	後谷遺跡	2012	久次牟田遺跡	3013	上征矢原遺跡
1017	苽生尾立第１遺跡	2013	白石第１遺跡	3014	東平遺跡
1018	苽生尾立第２遺跡	2014	白石第２遺跡	3015	寺迫下原遺跡
1019	馬場口遺跡	2015	旧牧跡第１遺跡	3016	中村遺跡
1020	中河原遺跡				

ｍの方形プランの周溝状遺構が１基確認されている。[12]今回発掘調査を行った新別府下原遺跡では弥生末の竪穴住居７軒と周溝状遺構３基・土壙４基が検出され、周溝状遺構１基・竪穴住居３軒・土壙２基が集落の１単位として抽出されたのは注目される。

古墳時代の遺跡としては、６世紀後半の須恵器（坏身・蓋）を出土した平山遺跡[13]、須恵器の坏・甕を出土した西ノ郡遺跡[14]がある。古墳としては前方後円墳３基・円墳２１基の計２４基で、その内２１基は積石塚である。発掘調査は行われていないので古墳の内容については不明である。古墳初頭の遺跡としては中原遺跡[15]がある。

当地域では発掘調査がほとんど行われていないために、地域史を具体的に描写できるまでには至っていない。

註

(1) 宮崎県『土地分類基本調査　都農』１９８４

(2) 茂山　護・大野寅夫「児湯郡下における旧石器」『宮崎考古』第３号１９７７

(3) 都農町教育委員会『都農町遺跡詳細分布調査報告書』１９８８

(4)～(10) 註３に同じ

(11) 石川恒太郎「児湯郡都農町岩山遺跡調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第１８集　１９７６

(12) 昭和６３年１１月、畑耕作中に発見された。

(13)～(15) 註３に同じ

第Ⅱ章　遺構と遺物

1. 調査区の設定と概要

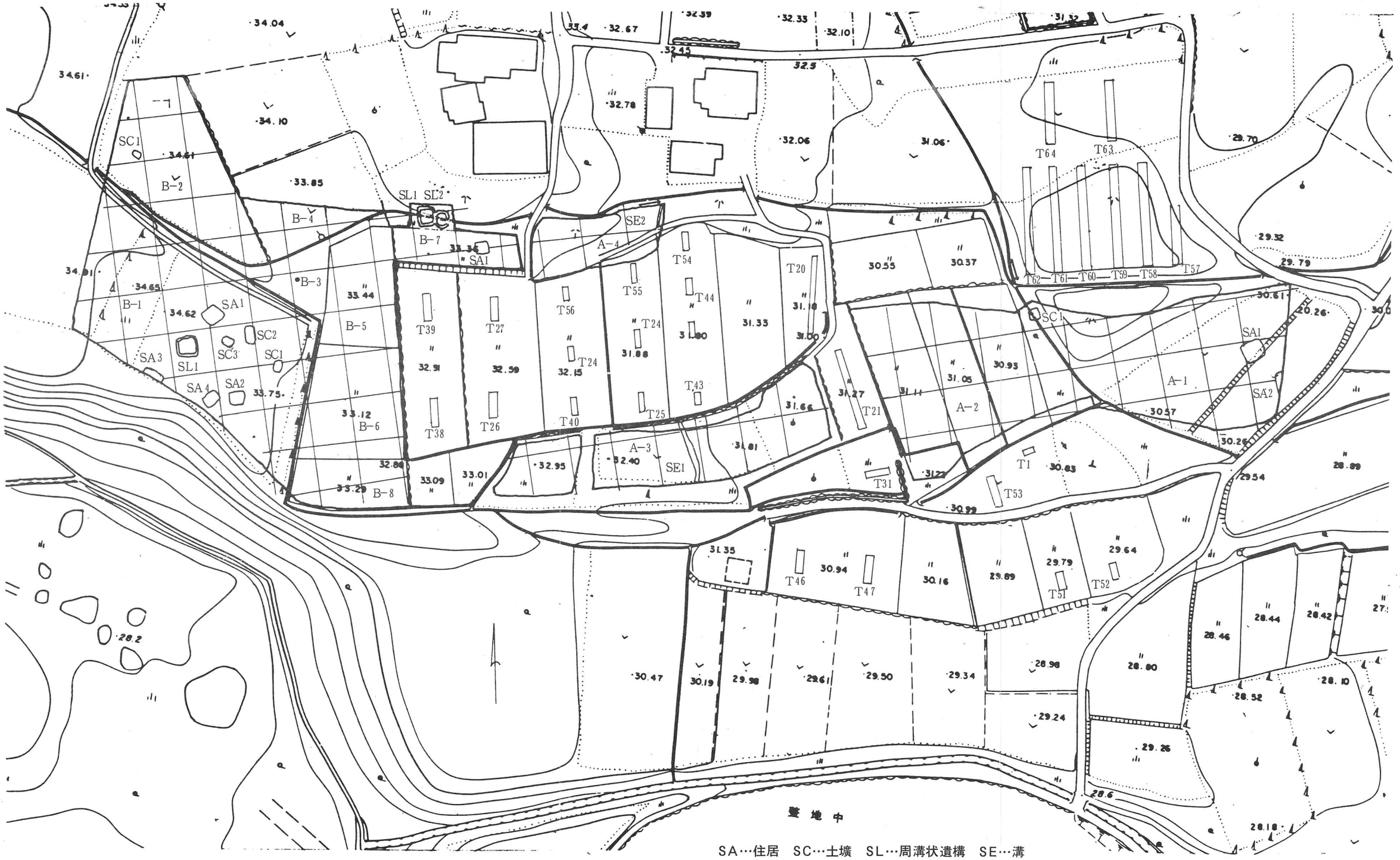
新別府下原遺跡（都農町大字川北字新別府下原）は、宮崎市の北々東約３８㎞の名貫川を南に臨む標高３０ｍに位置する。

都南地区圃場整備事業に伴って県教育委員会文化課が昭和６３年６月１０日～１６日に試掘調査を行った結果、遺跡が２ケ所確認されたので、昭和６３年９月５日～平成元年２月１日まで約１４０００㎡の発掘調査を都農町教育委員会が行った。南北方向で１０ｍ方眼のグリッドを設定し、発掘調査した順番で東からＡ・Ｂ地区とした。Ａ地区の北側を試掘調査した結果、窪地から縄文後期の土器片が出土したが、遺構の存在が推定される場所は既に削平されていた。Ａ地区（６０００㎡）では東側の部分で弥生末の竪穴住居２軒・土壙１基検出された。特に１号住居から磨製石庖丁１・両端えぐり入り石庖丁１・砥石１・磨石４・鉄鎌片などが出土したのは注目される。また西へ２００ｍ離れたＢ地区（８０００㎡）では弥生末の竪穴住居５軒・周溝状遺構３基・土壙４基が検出された。特にＢ－１区では竪穴住居４軒・周溝状遺構１基・土壙３基が検出されており集落の１単位が抽出された。１号周溝状遺構は幅約５０㎝の溝を隅丸方形に全周させており、一辺約５ｍの規模である。またＢ－１区では縄文の打製石鏃１が、Ｂ－８区では縄文後期の磨製石斧１・打製石斧３が出土した。

2. 包含層の状態

当遺跡では、アカホヤ層はＡ地区ではほとんど残存しておらず、Ｂ地区ではＢ－１・２・７区が残存していたが、他の区では残存していない。

当遺跡の水田部分の基本層序は、第Ⅰ層が黒褐色土層（Ｈｕｅ　１０ＹＲ３／１・水田耕土）、第Ⅱ層が赤褐色土層（7.5ＹＲ８／８・水田床・鉄分を多く含み、硬質である）、第Ⅲ層が黒褐色土層（１０ＹＲ３／１）、第Ⅳ層が黒色土層（１０ＹＲ1.7／１・細礫を多く含む）、第Ⅴ層が褐色土層（7.5ＹＲ４／４・アカホヤ層ブロックを含む）第Ⅵ層が黄橙色土層（7.5ＹＲ８／８・アカホヤ層）、第Ⅶ層が褐色土層（7.5ＹＲ６／８・砂礫層）である。畑部分の基本層序は、第Ⅰ層が黒色土（１０ＹＲ1.7／１）であり、水田の基本層序の第Ⅰ～Ⅲ層に対応する。遺物は第Ⅳ層から出土する。



第２図　新別府下原遺跡の遺構分布図(縮尺 1／1000)

3. 弥生時代の遺構と遺物

弥生末の遺構はＡ地区の東側のＡ－１区で竪穴住居２軒・土壙１基、Ｂ地区のＢ－１区で竪穴住居４軒・周溝状遺構１基・土壙３基、Ｂ－２区で土壙１基、Ｂ－７区で竪穴住居１軒・周溝状遺構２基が検出された。弥生末の甕・壷・高坏・鉢などと伴に、石庖丁・砥石・磨石・石錘などの石器、鎌・鏃などの鉄器が出土している。

(1) 竪　穴　住　居（第３・５図）

竪穴住居はＡ地区の２軒、Ｂ地区の５軒の計７軒が発掘調査され、Ａ－１区・Ｂ－１区・Ｂ－７区の３つの集落単位に分かれる。竪穴住居のプランは一辺４～５ｍの方形で、主柱穴は２本柱で、一部に４本柱が見られる。竪穴住居の切り合いはない。以下、詳細については竪穴住居観察表（第１表）を参照されたい。

(2) 周溝状遺構（第４図）

周溝状遺構はＢ－１区で１基、Ｂ－７区で２基検出された。周溝状遺構は幅５０cmの溝を隅丸方形に全周されており、一辺５ｍの規模である。

Ｂ－１区の１号周溝状遺構は主軸は南北方向で、幅５０cm、深さ１６cmの溝を隅丸方形に全周させており、５１０cm×４８０cmの規模である。土器は東側の溝から甕などが出土しているが、量は少ない。Ｂ－７区の１号周溝状遺構は幅８０cm、深さ４０cmの溝を隅丸方形に全周させており、５５０cm×４８０cmの規模である。土器は東側と北側で出土しており、特に北側では壷・甕・高坏・鉢などが多数出土している。Ｂ－７区の２号周溝状遺構は１号周溝状遺構に切られ、水田造成時にかなり削平されており、幅５５cm、深さ１３cmの周溝が断続的に隅丸方形に巡っており、４９５cmの規模である。

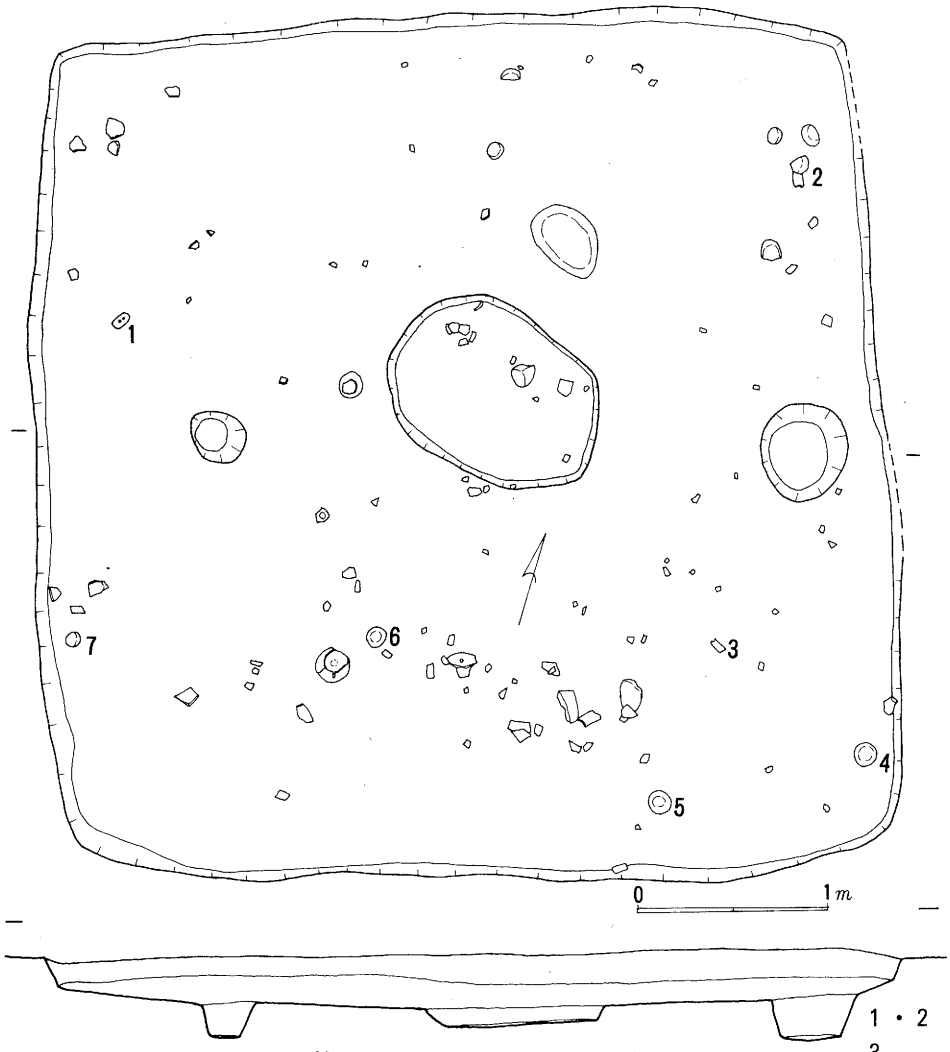
(3) 土　　壙（第５図）

土壙はＡ－１区で１基、Ｂ－１区で３基、Ｂ－２区で１基検出された。

Ａ－１区の１号土壙は長さ２７０cm、幅２６５cm、深さ３０cmの規模で、甕１が出土している。Ｂ－１区の２号土壙の規模は長さ３８５cm、幅２３０cm、深さ２８cmで、中に長さ１８０cm、幅１０５cm、深さ６cmの小土壙がある。高坏・甕・鉢・壷などが多数出土しているが、柱穴・焼土はない。３号土壙は長さ２２０cm、幅１７０cm、深さ１５cm、４号土壙は長さ３７０cm、幅２６５cm、深さ５cmの規模である。Ｂ－２区の１号土壙は長さ２３５cm、幅１８０cm、深さ２５cmで、土器片１・磨石１が出土した。土壙にはすべて焼土はない。

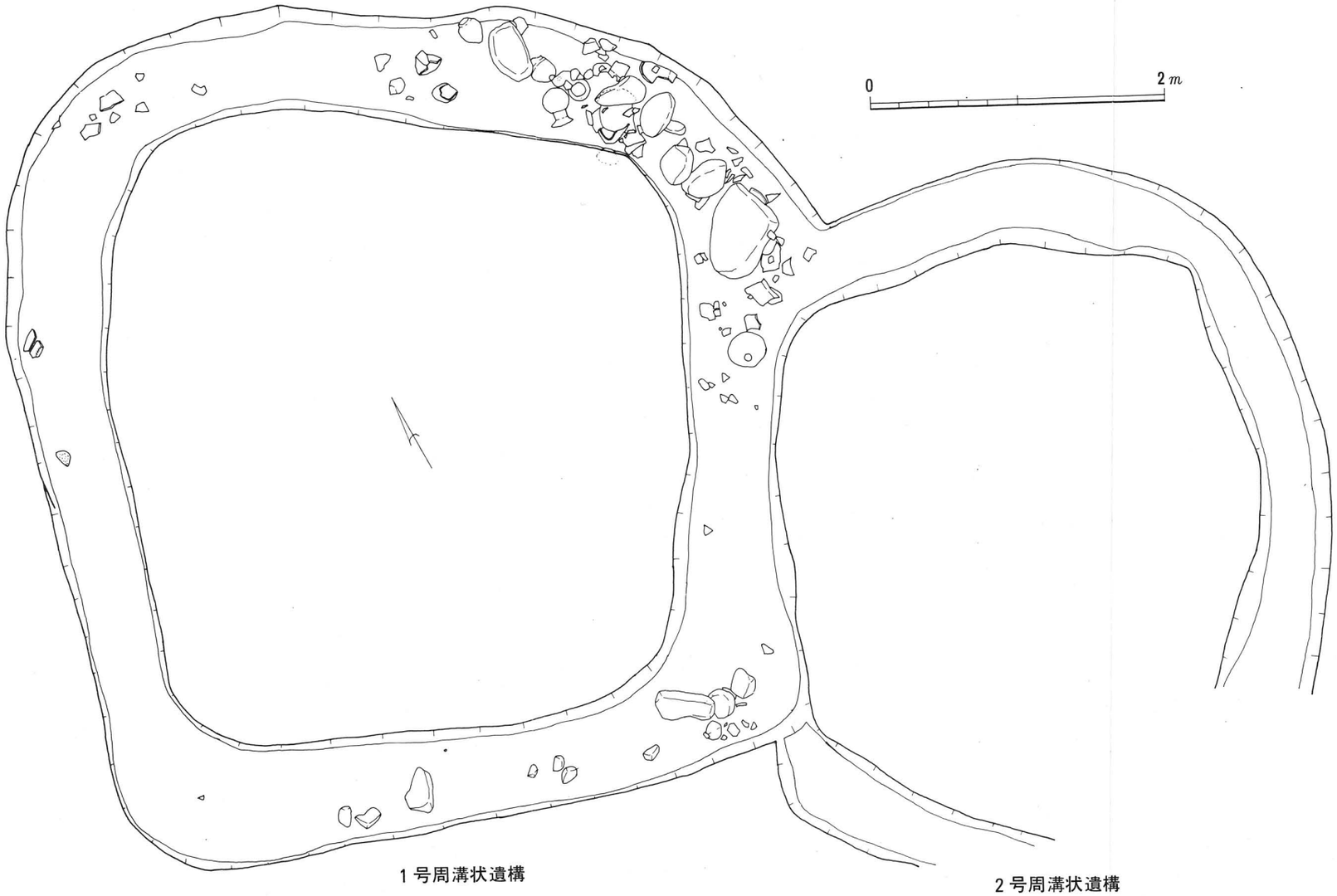
第1表　竪穴住居観察表

地区	住居	プラン	規模 長さ×幅×深さcm	面積 m²	柱穴	焼土	備考
A－1	1号住居	方形	455×445×15	20.2	2	有	石庖丁2・磨石4 砥石1・鉄鎌1
	2号住居	方形	(420+α)×(180+α)×15	(17.6)	1+α		
B－1	1号住居	方形	400×365×20	14.6		有	
	2号住居	方形	365×340×40	12.4		有	石錘1
	3号住居	方形	580×(350+α)×31	(20.3)	2+α	有	
	4号住居	長方形	490×390×30	19.1	2	有	磨石1・鉄片3
B－7	1号住居	方形	470×(450+α)×10	(21.2)		有	擦切り石片3

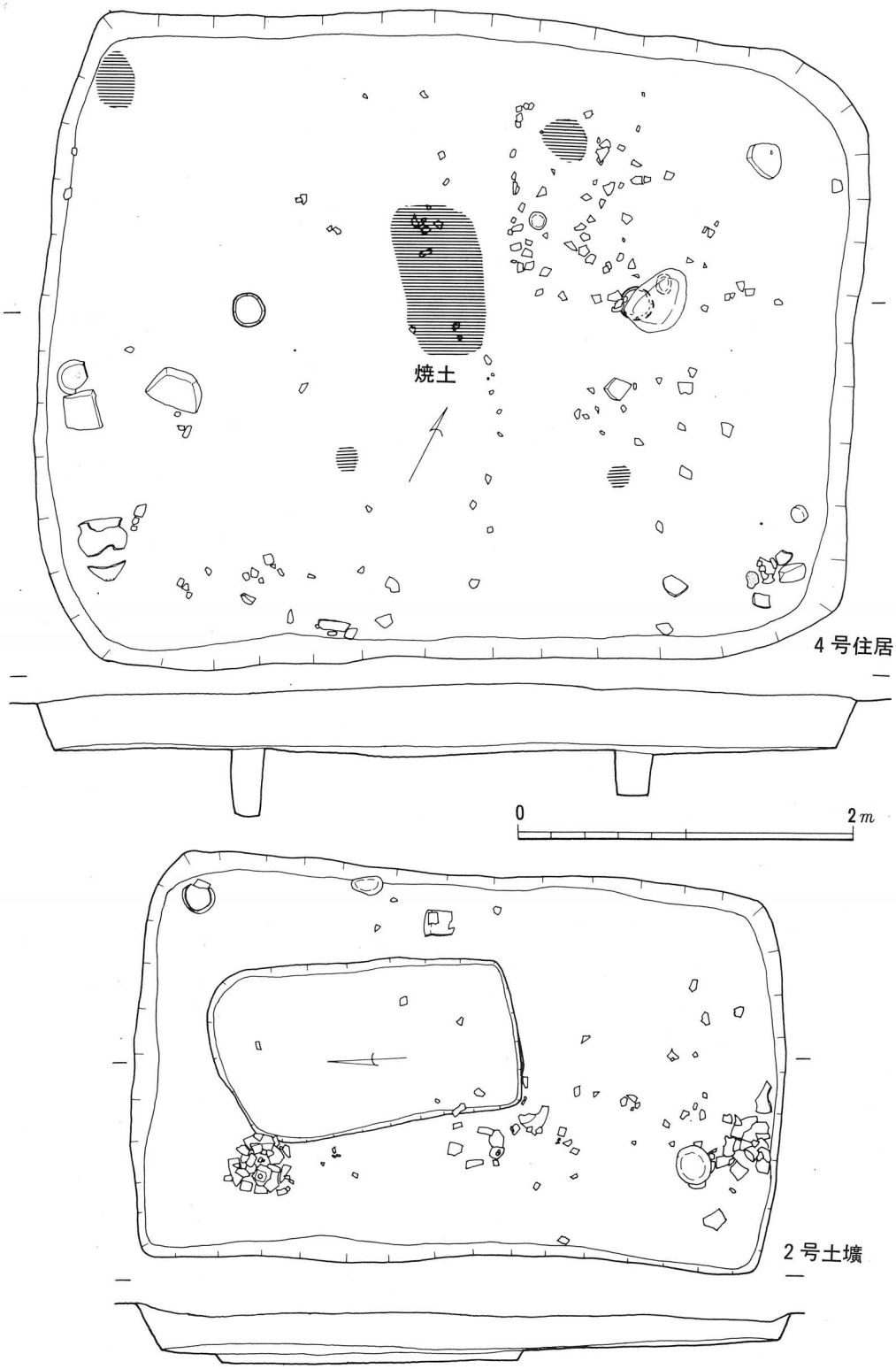


1・2　石庖丁
3　砥石
4～7　磨石

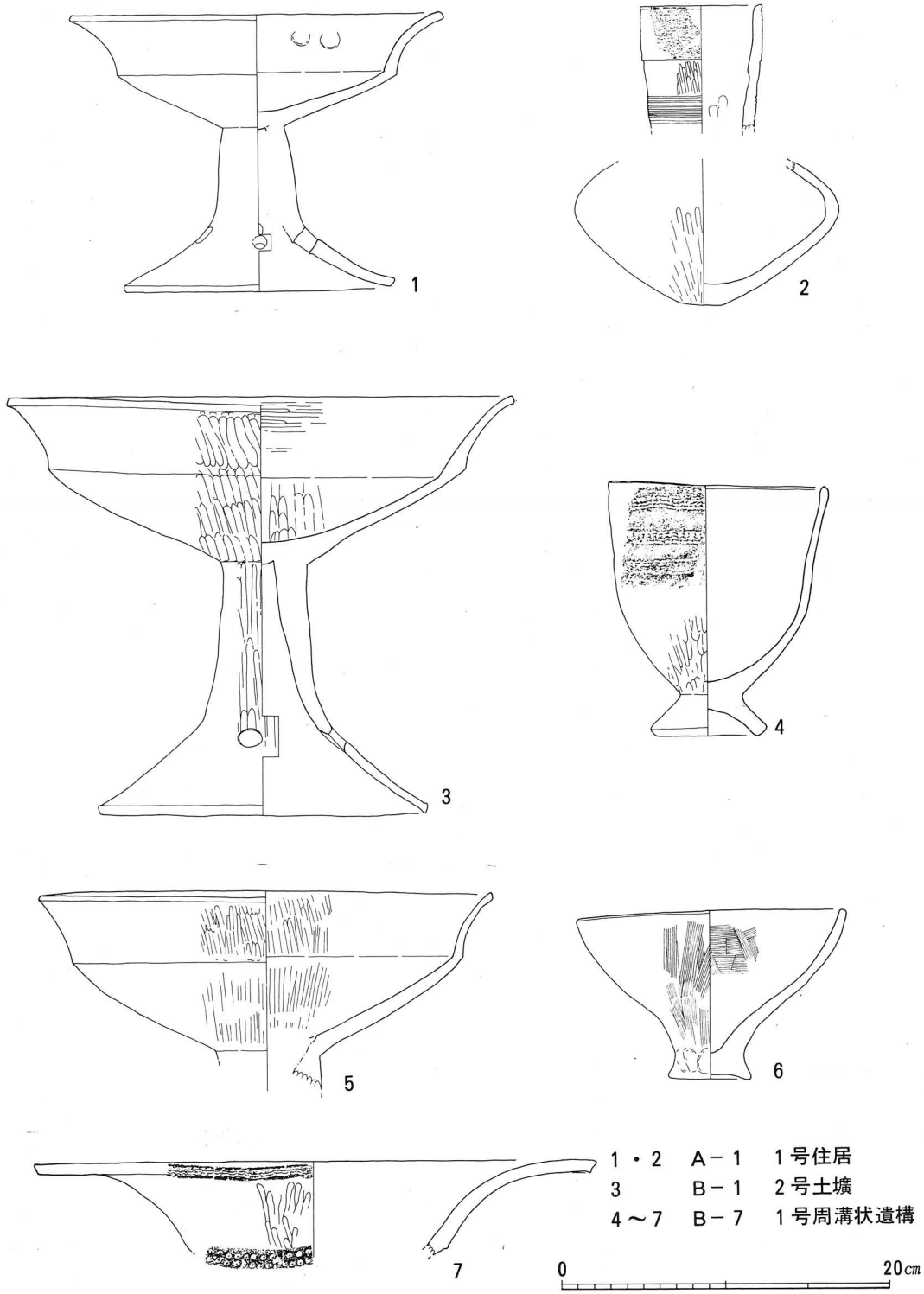
第3図　A地区1号住居実測図



第4図　B—7区1・2号周溝状遺構



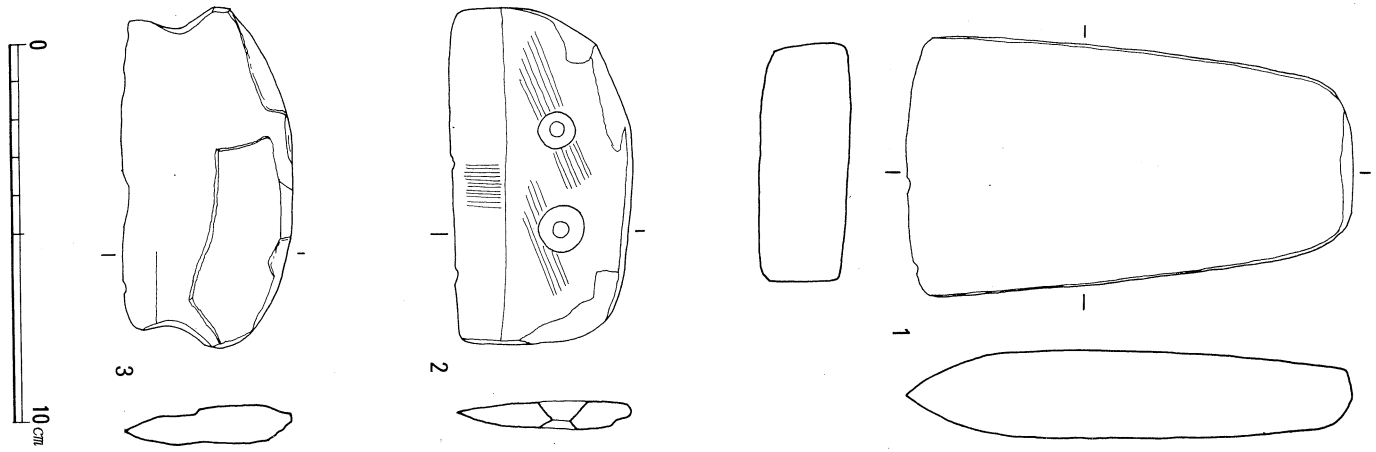
第5図　B1区4号住居・2号土壙実測図



第6図　弥生土器実測図

図面番号	区	遺構名	器種	器部	調整 外面	調整 内面	焼成	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
1	A-1	SA1	高坏	坏部～脚部	坏部…斜・横方向のナデの後、指押え 脚部…ナデ	坏部…一部指押え 脚部…絞り	良好	橙（Hoe 5YR6／6） 黒褐（2.5Y 3／1）	橙（Hue 5YR 6／6）	透明に光る粒、向、灰色の砂粒を含む	4方向の円形透し
2	A-1	SA1	壺	口縁部～底部	口縁部…縦方向のヘラ磨キ 胴部…縦方向のヘラ磨キ 底部…ナデ	口縁部…横ナデ、指押え 胴部…ナデ	良好	橙（5HR 6／6） にぶい黄褐（10YR 5／4）	橙（5YR 6／6） にぶい黄橙（10YR 5／4）	透明に光る粒、向、黒灰色の細砂粒を含む	口縁部に櫛描波状文と10条の沈線
3	B-1	SC2	高坏	坏部～脚部	坏部…縦方向のヘラ磨キ 脚部…縦方向のヘラ磨キ	坏部…横・縦方向のヘラ磨キ 脚部…絞り・ナデ	良好	明赤褐（5YR 5／6） にぶい黄橙（10YR 7／4）	橙（5YR 6／6） にぶい黄橙（10YR 7／3）	0.5～3ミリの白・黒・茶・透明で光る砂粒を含む	4方向の円形透し
4	B-7	SL1	高坏	坏部	坏部…縦方向のヘラ磨キ	坏部…縦方向のヘラ磨キ	良好	橙（5YR 6／6） にぶい黄橙（10YR 7／4）	橙（7.5YR 7／6）	1～4ミリの白・茶の砂粒を含む	
5	B-1	SL1	高坏	坏部	坏部…縦方向のヘラ磨キ	坏部…磨キ	良好	にぶい黄橙（10YR 7／4）	橙（7.5YR 7／6）	2ミリ前後の白・灰色の砂粒を含む	口唇部…櫛描波状文 坏部…竹管文
6	B-7	SL1	鉢	口縁部～底部	胴部…ナデ、ヘラ磨キ 底部…ナデ	胴部…ナデ 底部…指押え、ナデ	良好	明黄褐（10YR 7／4）	明黄褐（10YR 7／6）	2～4ミリの白・茶・透明の砂粒を含む	スス付着 口縁部…3段の櫛描波状文
7	B-7	SL1	鉢	口縁部～底部	口縁部…ナデ 胴部…縦方向のハケ目 底部…指押え、ナデ	口縁部～胴部…横方向のハケ目、縦方向のハケ目 底部…ナデ	良好	にぶい黄橙（10YR 7／4）	橙（7.5YR 7／6）	白い細砂粒・2～3ミリの茶・灰の粒を含む	

第2表　弥生土器観察表（SA…竪穴住居・SC…土壙・SL…周溝状遺跡）



1　B－7区
2・3　A－1区　1号住居

第7図　磨製石斧・石疱丁実測図

第Ⅲ章　ま　と　め

新別府下原遺跡は縄文時代後期と弥生時代中期・後期末葉～庄内式併行期の遺跡であるが、最盛期は弥生末～庄内併行期の一時期であり、その後は遺跡としては営まれていない。弥生中期の集落（５＋α軒）から末の集落（７軒）の間には断絶があり、未調査区に集落の存在が推定される。

縄文後期の遺物としては、貝殻条痕の土器に共なって打製石鏃・打製石斧・磨製石斧などが出土したが、残念ながら遺構は存在していなかった。遺構は未調査区に求められる。遺構に共なわなかったが、定角式の磨製石斧は県内では初であり、石材の蛇紋岩の産地を今後特定する必要がある。

弥生時代中期の住居は、試掘のみであり集落の広がりを追究できるまでに至っていない。５軒の住居の存在が確認されたが、一時期での同時存在の軒数は不明である。弥生末の住居は７軒発掘調査され、立地からＡ－１区・Ｂ－１区・Ｂ－７区の３グループに分かれる。県内で弥生時代後期後半～末の集落で発掘調査されたのは、日向市の越シ遺跡[1]（２軒）、川南町の上ノ原遺跡[2]（６軒）、西都市の寺原第１遺跡[3]（２軒）、宮崎市の熊野原遺跡Ｂ地区[4]（１６軒）・前原北遺跡[5]（１６軒）・源藤遺跡[6]（５軒）、清武町の浦田遺跡[7]（６軒）、野尻町の大萩遺跡[8]（６軒）、都城市の丸谷第１遺跡[9]（２軒）・祝吉第１遺跡[10]（７軒）・祝吉第２遺跡[11]（１３軒）などがあるが、ほとんどは日向型間仕切り住居[12]を主体とする集落であり、日向型間仕切り住居を有しない集落の様相は不明であった。都農町内における弥生時代の集落としては境ケ谷第１遺跡[13]で竪穴住居の一部が検出されたのみであった。Ｂ－１区で周溝状遺構１基・竪穴住居２～３軒・土壙２～３基という集落の基本的な一単位が抽出された。竪穴住居は面積が２０㎡前後と日向型間仕切り住居を除くと当時期の方形プランの竪穴住居としては標準的である。柱穴はＢ－１区の３号住居の４本柱を除くと２本柱を基本としている。

周溝状遺構は県内では日向市の百町原地区遺跡[14]１基、都農町の新別府下原遺跡３基、川南町の野稲尾遺跡[15]２基、新富町の鬼付女西遺跡Ｂ地区[16]１基、宮崎市の熊野原遺跡Ａ地区[17]１基・熊野原遺跡Ｃ地区[18]１基、都城市の年見川遺跡[19]１基が発掘調査されており、野稲尾遺跡の後期初頭を上限として熊野原遺跡Ｃ地区の布留式（古段階）を下限としている。プランは熊野原遺跡Ａ地区１号周溝状遺構の盾形を除くと、隅丸方形で一辺５ｍの規模が標準的であるが、熊野原遺跡Ａ地区１号周溝状遺構の７００×６００㎝が最大規模である。周溝状

遺構は集落内及び近接して営まれており、集落を構成する一要素である。周溝の北側や東側から土器が集中して出土する点、熊野原遺跡C地区では周溝内の焼土の存在などから集落共同体で行われる『祭祀』の可能性が指摘されているが、その具体的な内容は不明である。

A－1区の1号住居から方形の石庖丁と両端えぐり入りの石庖丁が出土したのは注目される。県内では73遺跡で131個の石庖丁が出土し、そのタイプの内訳は直線刃外湾形4.3％、外湾刃半月形24.3％、方形22.9％、えぐり入り48.6％である。えぐり入り石庖丁が半数近くを占めており、広義の宮崎平野の海岸部を中心に分布し、一部山間部にも見られる。高鍋町の持田中尾遺跡[20]2号住居の前期末～中期初頭の外湾刃半月形を上限として、宮崎市の熊野原遺跡C地区1号住居・祝吉第2遺跡10号住居などの古墳初頭を下限としている。えぐり入りは大萩遺跡5号住居の後期後半を上限として、熊野原遺跡C地区1号住居の古墳初頭を下限としているが、川南町の大迫遺跡[21]で23個も出土しており、上限は海岸部で溯る可能性がある。

A－1区の1号住居は櫛描波状文を有する平底の壷・小型高坏から後期末葉に、B－1区の2号土壙は短く外反する坏部を有する大型高坏・口縁部が若干外反する平底の小型甕から後期末葉に、B－7区の1号周溝状遺構は櫛描波状文と竹管文を有する装飾高坏・長い頸部の丸底の壷・口縁部が若干外反する上げ底の小型甕・櫛描波状文を口縁部に有する高台付きの鉢から庄内式併行期に比定される。[22]

今回の面的な調査によって集落の規模と基本的な単位が確認されたのは大きな成果であった。細かい土器編年・集落構造などの問題点は来年度の本報告書の中で明らかにしていきたい。

註

(1) 緒方博文　「越シ遺跡」『亀崎土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財報告書』1986

(2) 永友良典　「上ノ原遺跡」『川南町文化財調査報告』4　1986

(3) 蓑方政幾　「寺原第1遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集　1985

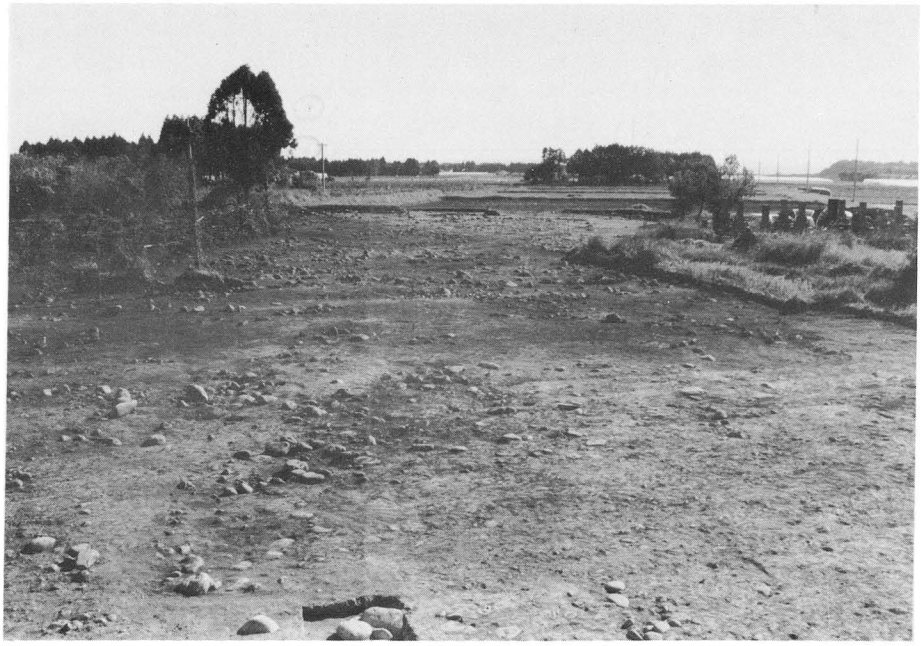
(4) 菅付和樹　「熊野原遺跡B地区」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第4集　1988

(5) 北郷泰道　「前原北遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第４集　１９８８
(6) 伊東　但　「源藤遺跡」『宮崎市文化財調査報告書』１９８７
(7) 谷口武範　「浦田遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第２集　１９８５
(8) 石川恒太郎他　「大萩遺跡(1)」『特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』１９７５
(9) 面高哲郎　「丸谷第１遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(3)１９８０
(10) 北郷泰道　「祝吉遺跡」『都城市文化財調査報告書』第１集　１９８１
(11) 面高哲郎　「祝吉遺跡」『都城市文化財調査報告書』第２集　１９８２
(12) 長津宗重　「日向型間仕切り住居研究序説」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第２集　１９８５
(13) 石川恒太郎　「都農町岩山遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第１８集　１９７６
(14) 緒方博文　「百町原地区遺跡発掘調査概要報告」『昭和６３年度埋蔵文化財担当専門職員研修会発表資料』１９８９
(15) 近藤　協　「野稲尾遺跡概要報告」『宮崎考古学会発表資料』１９８７
(16) 昭和５９年、県教育委員会が発掘調査した。本年度、宮崎県文化財調査報告書第３２集に掲載。
(17) 菅付和樹　「熊野原遺跡Ａ地区」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第４集　１９８８
(18) 面高哲郎　「熊野原遺跡Ｃ地区」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第２集　１９８５
(19) 宮崎県立博物館『図説　宮崎の歴史』１９６７
石川恒太郎　『宮崎県の考古学』　１９６８
(20) 北郷泰道　『持田中尾遺跡』１９８２
(21) 川南町教育委員会『川南町の埋蔵文化財』１９８３
(22) 長津宗重　「弥生後期～庄内・布留式併行期の土器編年」『シンポジウム地域間交流を考える』１９８５

図　　版

図版 1

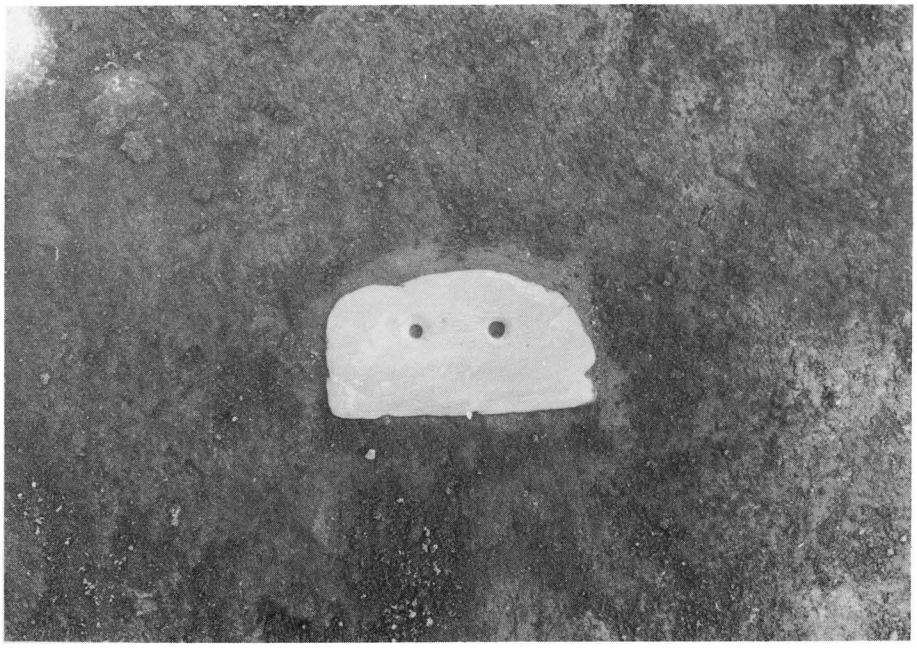
A 地区（発掘前）



A 地区（西から）

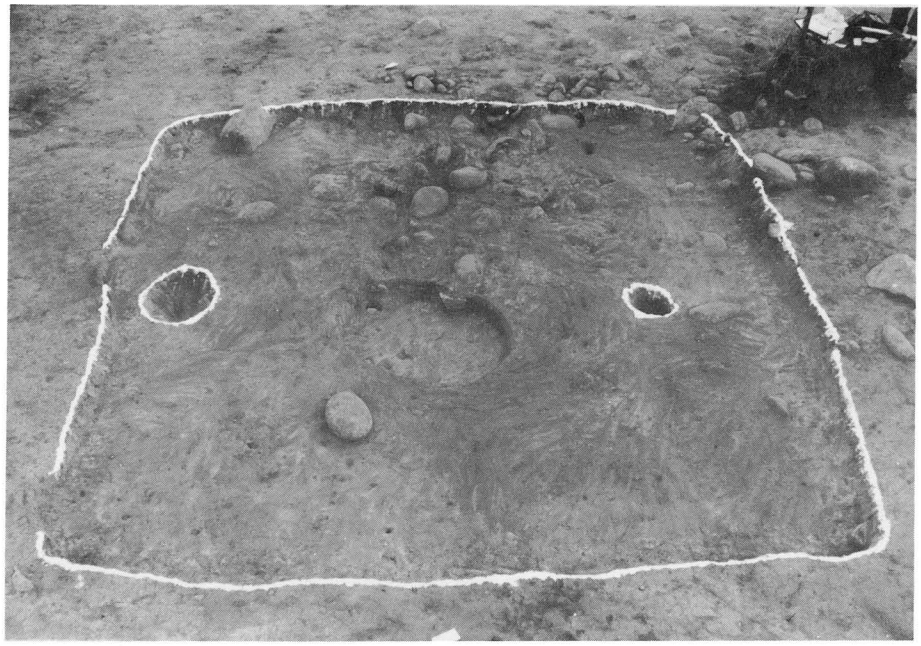
図版 2

A地区1号住居土器出土状況

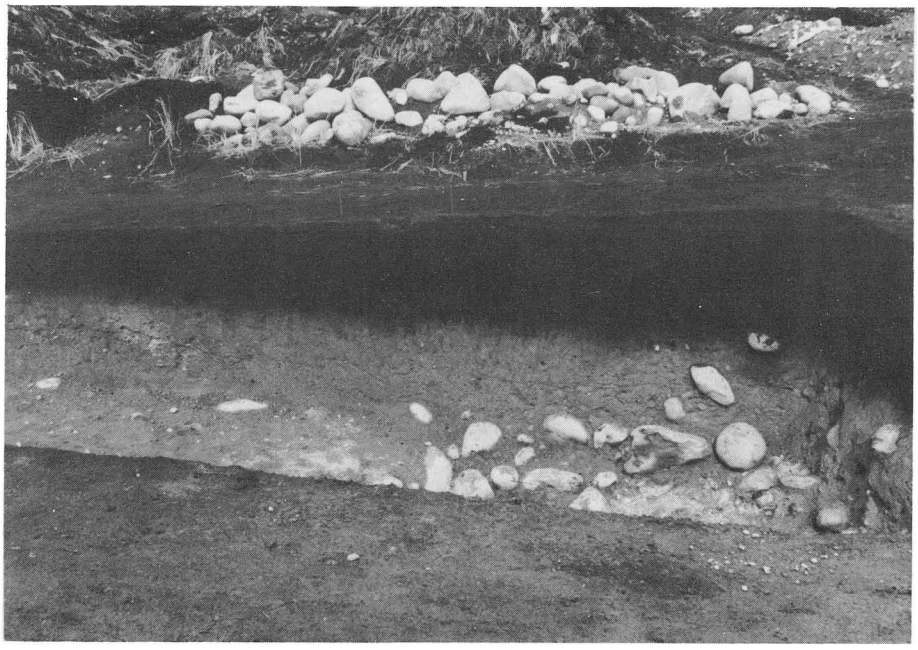


A地区1号住居出土石庖丁

図版 3



A地区 1 号住居



B地区土層断面

図版 4

B地区（発掘前）

B地区全景（東から）

図版 5

B－1区　全　　景

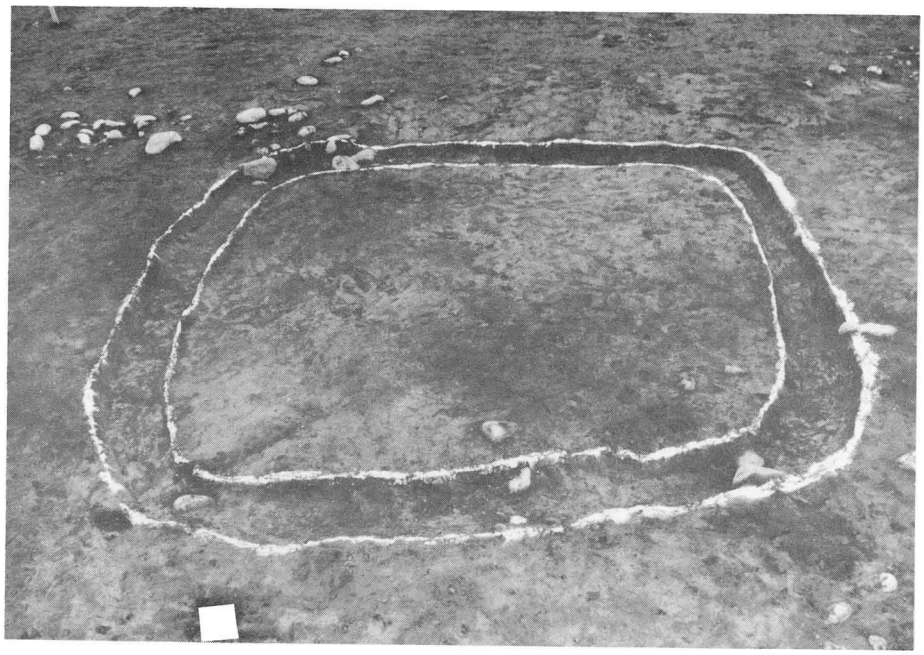
B－1区　全景（東から）

図版 6

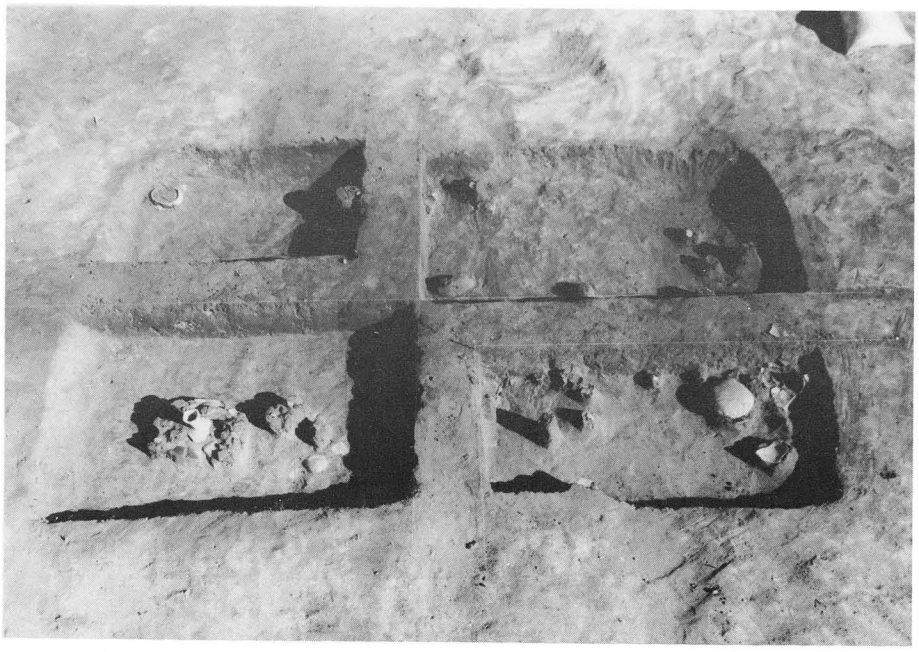
B－1区　3号住居

B－1区　4号住居

図版 7

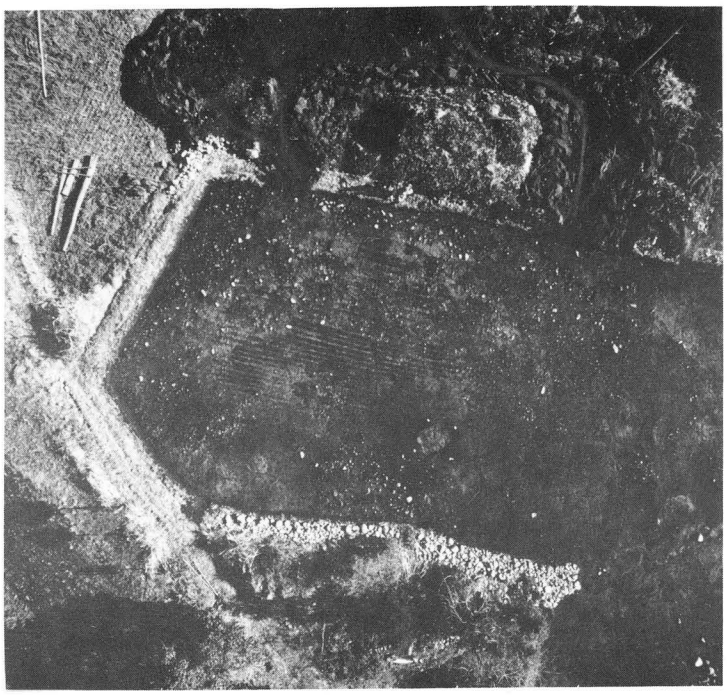


B－1区　1号周溝状遺構

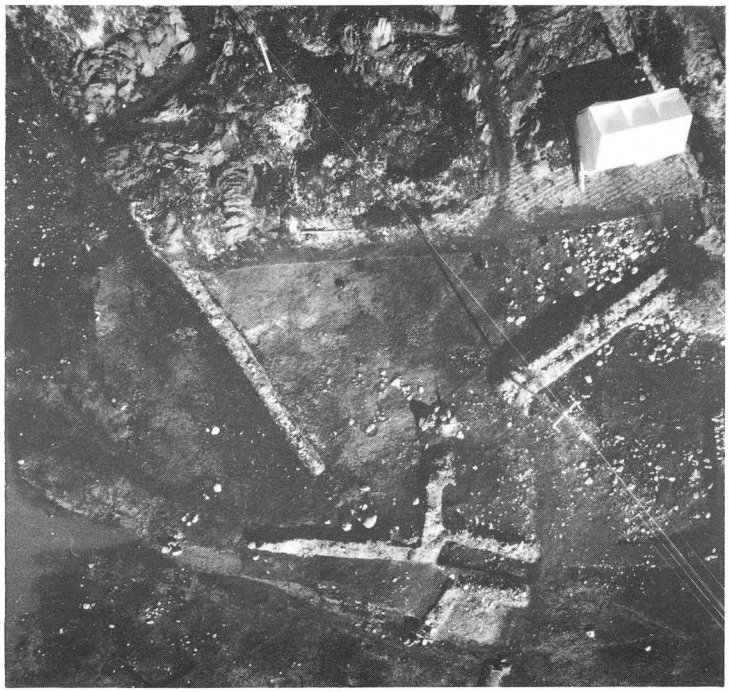


B－1区　2号土壙遺物出土状況

図版 8



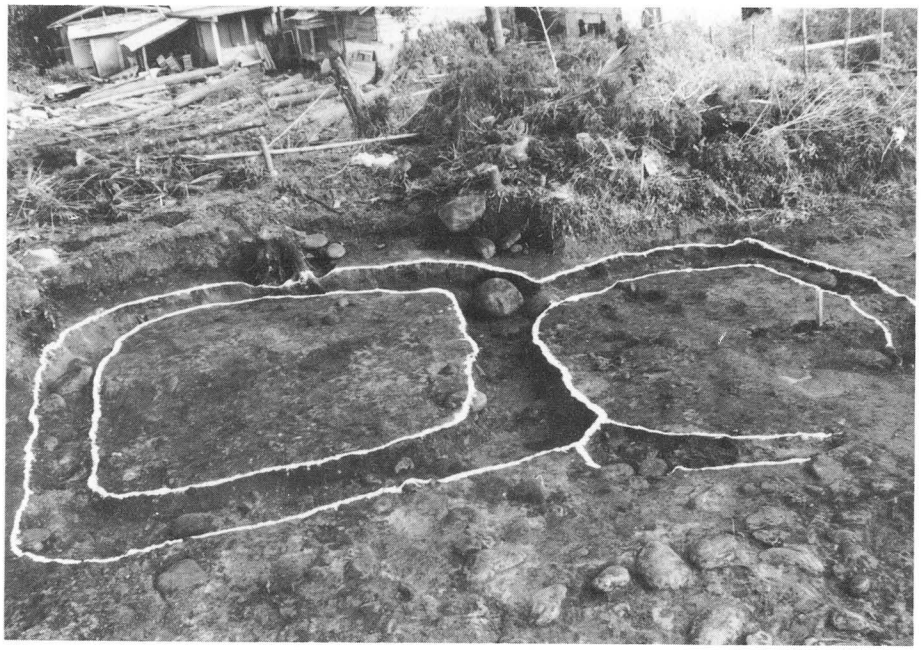
B－2区　全　　景



B－3・4　全　　景

図版 9

B－7区　全　　景



B－7区　1・2号周溝状遺構

図版 10

B－7区　1号周溝状遺構土器出土状況

圃場整備中のA地区（西から）

都農町文化財調査報告書　第２集
新別府下原遺跡

発行年月　平成元年３月31日
編集・発行　都農町教育委員会
印　　刷　有限会社　熊谷印刷